
紫陽花

ニンニン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫陽花

【コード】

N0037W

【作者名】

ニンニン

【あらすじ】

孤独感に苛まれる一高校生と彼の前に現れた謎の女性を廻る物語を紫陽花の季節にからめて綴る

第一章

藤塚良太は重い足を引きずりながら、いつもの通学路を歩んでいた。「今日もまた孤独か……」このところ憂鬱な思いが続いていた。「こんなはずではなかったんだが……」若干十五才である。それでも彼にしてみればその十五年の人生で初めての敗北感に捕らわれた毎日が続いていた。「劣等性だった小学校の時ですら友人がいたのに、なぜ、なぜ、友人が出来ないんだ？」毎日同じことを自問自答しながら彼は駅前の大通りから裏の路地へと向きを変えた。

家からは地下鉄に乗って高田馬場で降りる。後は歩きだ。通学路は大通りを当初は利用していた。そちらを行ったほうがにぎやかなのだが、最近は彼はわざとこの狭い路地を通った。別にこちらが近道とかいうわけでもない。なんとなく通ってみたら何か彼の感性に訴えるものがあつたというわけだ。「今の俺の青春そのものの裏道だな……」路地に入っていくなりに目に飛び込んでくる崩れかかった板塀を見て、彼は自虐的な思いに駆られた。彼の心情にぴったりの、うら寂しい雰囲気中路地だったのである。

その辺りは早稲田大学が近かつたこともあるのだろう。その路地には古いアパートや下宿屋と化した古い民家が軒を連ねていた。色で言うなら灰色というよりも「鈍い」色という言い方が当たっていただろう。すべてがくすんでいた。板塀も、家の壁も、屋根も何もかもが。中には今にも崩れそうなボロ屋もあつた。

ただ、不潔感はなかった。良く掃除されていたというのだろうか。ボロ屋でも玄関先にはきれいな花が植えられていたり、また路地にはごみ一つ落ちていない。おそらく住人達が掃除をこまめにしているからだろう。清潔感とまでは言わないが、手入れが行き届いた感じは強かった。古都の古びた寺院、それも観光スポットから外れた

所にあるそれを思い起こして貰えばいいかもしれない。

その路地裏の古屋の中でも特に彼のお気に入り、その路地が終わりかけの所辺りにある古いアパートだった。

その存在感は格別だった。

そのアパートは路地からさらに一段低いところにあつて、鉄製の錆びた古い階段を少し降りたところに広がっていた。古い木造の二階建てである。狭い路地から広がるその空間の、何とも言えない開放感が彼の心を捉えたというわけである。路地裏であるにもかかわらず庭が広く、ほぼアパートと同じぐらいの敷地を占めていた。ただ、その庭はアパートと同じく古びていて、手入れもされてはいるのだろうが雑然とした感じで、小さい池とそのほりに灯籠が一つあるのだが何かしら不釣り合いな感じで、「よく手入れすれば、いい庭園にもなるだろうに」などと、藤塚は毎日この庭の前を通るたびに考えていた。実際四月も五月も、美しい花々が咲き誇るといふような光景にはついぞお目にかかったことはなかった。従つてその開放感は彼の心を捉えて良かったわけだが、彼の心を芯から慰めるような存在感とはならなかったということである。「まあ、これも俺の青春を象徴するようなアパートなんだな」つたがからまつて所々モルタルがはげているそのアパートの壁を眺めながら、開放感を一瞬感じはするものの、結局彼は最後にはそこでため息をつくのが日課であつた。

そのアパートを通り過ぎると、目の前に大通りが見えてくる。路地の終了である。「さあ、いやな学校だ」彼はさらに重い気分になり、ちひしがれると、このままどこかへ逃げ出したい衝動に駆られたが、気を持ち直すと、胸をはって大通りへ出た。「惨めな格好は見られたくない」そんな思いからであつた。中学校では優等生だった。それでいて友人も大勢いた。男子も女子も。すべてが楽しい毎日だった。「でも今の俺は」大通りに出れば同級生の何人かと必ず出くわすことになる。そんな彼らに自分のうちひしがれた姿は見せたくない……。

大通りに出ると急に明るくなった。制服を来た女子学生の姿がまぶしく目に映る。彼の学校の隣にある名門女子高校の生徒たちである。きゃっきゃつと騒がしい彼女たちを見てるとますます藤塚は自分が惨めになった。「でも行くしかない」

しばらく通りを行くと母校の正門が見えた。

飲み込まれるように学生たちが正門の中へと消えていく。皆笑顔だ。青春を謳歌しているその表情こそが彼にとっては何より見るに耐えないものであったのだが……。大勢の学友に取り囲まれ、彼は孤独感をさらに募らせる。その中を一人、藤塚は誰とも挨拶をすることなく、俯き加減のまま、その人の波の中に消えていった。

第二章

友人が出来ないことは、多感な高校一年生にとっては何より辛いことであつたに違いない。六月、梅雨の季節に入る前に、藤塚の心はすでに暗雲で満たされていた。「最初はまあまあだったんだが」藤塚は新学期の頃を思い返した。近くの席に座っているクラスメイトと会話をし、気の会いそうな級友とは下校の時には連れ立って帰るなど、一見順調な高校生生活の始まりとも思えた。

しかし続かなかった。

皆が離れていくのである。と、少なくとも藤塚にはそう見えた。

「何故だ？」中学時代と自分は何も変わっていない。その中学時代、自分はクラスの人気者だったではないか！成績抜群、スポーツもそこそここなした。生徒会では会長も務めた。皆が自分に擦り寄ってきた。級友の暖かい目が常に彼を取り囲んでいた。「しかし今思えば」彼は中学時代を振り返って冷静に自分を取り巻く人間関係を考察してみた。するとあることが見えてきた。「俺が実は、皆を、クラスを制御していたのかもしれない」彼はその優秀な知性で皆を支配下に置いていただけなのではないか？彼と付き合っていて決して損は無い、皆はそう思っただけで自分の周りに集まっていただけではない

か？今にして思えば彼の交友関係はそんな程度のものだったのかも
しれない。でも中学時代の友人とは所詮そんなものではないだろう
か？しかしそんな一般論は今の彼には何の慰めにもならなかった。

高校に入ると状況は一変したからである。

自分が急に小さくなったように感じられた。気がつくと自分より
賢い連中がごろごろ周りにいた。人気者は別に現れた。それも何人
も。一つのクラスだけ見ても、すさまじい個性のぶつかりあいの中
であつた。そんな中で彼は完全に埋没してしまったのだ。「どうす
れば浮かび上がるだろうか？」毎日考えるが答えは出ない。眠れ
ない。「このままでは溺れてしまう」もがけばもがくほどに藻が足
に絡まつてきそうな、そんな思いで過ごす毎日……。

学校に行くのも苦痛。

学校にいるのも苦痛。

そして……。六時限の授業の終了を告げるベルが鳴った。本来な
らいやな学校から開放される瞬間なのだが……。授業が終わっても、
しかし彼の心は晴れることは無い。いやむしろますます暗雲が立ち
込める。また一つ苦痛に襲われるのだから。

適当に友人同士三々五々下校する級友達を横目に、彼は一人で下
校準備を始める。はじけるように笑顔で校門を飛び出していく生徒
達からの、自分への哀れみの視線を感じながら、彼は一人寂しくい
つもの下校路を歩む。「早く路地に逃げ込みたい」大通りからいつ
もの路地へと左折して入る。なぜかほつとする。

今日もそうして路地へと逃げ込んだ。いつもの下校路。いつもの
裏道。ひとりぼっちの自分。

雨が降り出した。「僕のこの悲しい思いを全部洗い流してくれな
いものか？」そんなことをふと藤塚は思った。するとなぜか涙が出
てきて止まらなくなった。「こんな惨めな思いを続ける位ならいつ
そ……」と藤塚があらぬ考えをめぐらしたその瞬間だった。バラバ
ラと雨が大粒になって激しく降り始めた。「早く帰らなきゃ」本格
的に降り出した雨に打たれながら、彼は涙を拭くと、急ぎ足で駅へ

と向かった。

第三章

梅雨に入った。今まで梅雨の季節がうつとうしいと感じたことの無かった藤塚だったが、さすがにこの年の梅雨はこたえた。彼の心の憂鬱さを増幅させるように長雨が続いた。藤塚を取り巻く状況はこの長雨と同じく一向に晴れ間が覗く気配が無かった。

そんな雨の中、藤塚の登下校は高田馬場駅から学校へと、いつもの路地を通って繰り返されていた。そんな平凡な通学路であるが毎日歩いていると、それなりに新しい発見に気がつき興味を引くこともあった。

例えば、高田馬場の駅である。駅の周辺にはいくつかラブホテルがあつて、その前を通つても学校へ抜けられる道があつた。興味本位からわざわざここを通る学友も多かった。藤塚は最初、このきらとした変に飾りつけの多いホテルが何の目的のためのものなのか実は分からなかった。

そのうち友人達が「そういう」ホテルだと会話を交わしているのを聞いて、「なるほど」と妙に感心したりしたものだ。田んぼに囲まれた大阪の下町で生まれ、中学一年からは新宿の神楽坂に近い閑静な住宅街の中のアパートに住んでいた。そんな藤塚にとって、そういう？怪しげな？世界と言うのはある意味新鮮であつた。

また、時に高田馬場から新宿へと足を伸ばしたりしたことがあつた。するとどうだろう。彼の今まで知らなかった東京の姿がそこには広がっていた。中学時代の彼の生活圏は、神楽坂から牛込、あるいは飯田橋、神田と続く方面で、整然とした都会の顔を見せる、そんな町並みであつた。ところが、雑居ビルの立ち並ぶ新大久保から新宿の歌舞伎町への町並みは、彼にとっての未知の風景であつた。くすんだビルディングを横目に街の路地を歩くと、そこには今までに彼があまり接したことの無いような、「学生でもなさそうだし、

サラリーマンでもなさそうだし……」といった感じの、だらしない服装に身を包んだ人が、昼間から、それも特に働くでは無しに街の路地をうろつろつしているのを目にする。「こんなところで寝泊りしているのだろうか？」と素朴な疑問すら覚えるような古く汚れたビルの窓に洗濯物がぶら下がっている。歌舞伎町に近くなつてくると、夕暮れともなると、派手な服装の若い女性が信じられないような露出度の高い服を着て、新大久保から新宿のほうへ流れていくのを目にする。「夜の仕事の人が……」そこにやはり派手な服装の若者も加わる。「定職がなくてぶらぶらしているのだろうか？」

今まで知らなかった東京の姿がそこには広がっていた。今までは接触が無かった階層の人々の生活の場がそこには広がっていた。「歌舞伎町方面へは足を踏み入れないように」と中学時代に先生から良く指導を受けた意味が今になって漸くわかったという感じだった。ところが皮肉なことに、放課後のこの探検散策は、孤独感に苛まれていた藤塚の今や唯一の気晴らしとも言えるように次第になっていった。多感な思春期の青年は「大人の世界」や「性」についても感受性豊かであった。歌舞伎町の猥雑な雰囲気は怖くもあったが、スリルもあって、いつしか、彼は学校が終わると何の目的もなく高田馬場から新宿歌舞伎町へとぶらぶら歩いて、その後、東口へ、そのようにして時間をつぶしてそれから帰宅するという毎日を過ごしていた。

藤塚には興味のつきない散歩コースでもあった。いろんな裏道を通るのだ。高田馬場は「鈍い」色の中にも整然としたさっぱり感が漂う街であったが、新大久保からの風景は違った。「鈍い」だけでなく、雑然として、明らかに汚れた、手入れのされていない街が広がっていた。清掃が行き届いたとはとても言えない様な有様であった。一種独特の臭いさえ感じられるところもあった。「東京に夢を求めて地方から働きに来た人たちのかな？」藤塚は勝手にそんな推測をしていた。安保闘争が終わり万国博覧会を成功させた日本は高度経済成長の道をひた走っていた。東京は立春出世を望む人、一

攫千金を望む人を地方からどんどん吸い上げていた。そんな想像はあながち間違っではないなかったであろう。「俺の親父もそうだったんだから」彼はそこに住む人たちの身の上、生活ぶりなどに思いを馳せてぶらぶら歩くことで、自分の憂鬱な気持ちが若干ではあれ和らぐのが何か不思議であった。「東京に来て生活が豊かになったと思ったが、何か俺は勘違いをしていたのかもしれない」藤塚は自分のアパートを思い起こした。確かに大阪での生活に比べれば暮らし向きはかなり豊かになった。しかし東京での豊かな生活の平均からはまだ下であつたろう。「自分も似た者どうしなのかもしれない」だから違和感無くこの雰囲気を楽しめるのか？

藤塚はまたこうも思った。「みんな頑張っているんだ」そう新大久保あたりは汚れた街ではあつたが不思議と活気があつた。新宿に着くとその活気は頂点に達した。藤塚は自分が大人の世界に少しずつ足を踏み入れていることに、何かしら怖いような、それについてわくわくするような期待感を感じていた。「なら俺も頑張らなくっちゃな」などと思えるようになった。

新宿の街にひしめく人ごみは、結局彼の屈折した気持ちを受け止めるクッションとして機能したと言える。この中にいれば安心だった。彼の心の揺れをこの巨大な人、人の緩やかなつなかりが形成する網の目が吸収してくれたわけである。

相変わらず友人が出来ず孤独な学校生活であつたが、この放課後の探検散策のおかげで少し藤塚の心に余裕が生まれてきていた。

「さて、本屋に行くか」新宿の某有名書店に立ち寄りそれから帰宅する。この地域で最大の本屋として有名なその書店は、藤塚の興味、探究心を満たすのに十分な蔵書量を誇っていた。今ではその本屋で時間をつぶすのも楽しみにもなっていた。藤塚はこうして自らの心の正と負の部分を巧みに中和させながら、傷心の青春生活を一日一日必死にもがきながら過ごしていった。

第四章

高校生活初めての中間試験も終わり学校の生活はそれなりにリズムがつかめてきたが、藤塚は相変わらず孤独な学校生活を送っていた。実は六月から新聞部に入部したのだが、このクラブはまことに変わり者の集まりで、彼を含め三人の新生がいたが友人として付き合えるような雰囲気のはいなかった。二人とも真面目一徹のお坊ちゃんという感じで、「これならサッカー部に入っていれば良かった」と後悔しても後の祭りであった。部活動以外で友人になろうというような雰囲気はまったくなかった。確かにサッカー部に入部していればまた藤塚を取り巻く状況は違っていたかもしれない。しかしこの頃の彼はある意味孤独に慣れてしまっていて、放課後のクラブ活動は友人としての付き合いは出来なくとも、彼の孤独感を和らげるにはまた、別の観点からは助けとなっていた。

学生運動は完全に下火となった時代であったが、それなりに火はくすぶっていた。過激派と呼ばれる連中がここかしこに拠点を設け、それなりに組織活動を行っていた。左翼を支持する人たちもまた多くいた。学者、知識人にその傾向が高かった。国鉄労働組合は毎年の如く？スト権スト？なるものを繰り広げていた。国民の多くが「日本列島改造で経済大国となる」という、時の首相のスローガンを信じ、高度経済成長の恩恵の元、日々確実に豊かになっていく生活水準を実感し、毎日の暮らしを謳歌していた。ただ国が全体として豊かになっていくということは、国の中のひずみが大きくなっていくことでもあった。そのひずみの受け止め役として、これらの左翼運動がそれなりに機能し働いていたというわけである。実際、藤塚は高田馬場から新宿までの街歩きを通して、何となくそういう社会のひずみを感じとっていた。身近な所であれば、彼の高校の隣はお嬢様学校として有名な女子高校があったが、道路を挟んで反対側の街の一角には、今にも崩れそうな古い家が立ち並んでいる路地があつて、そこではみすばらしい格好をした子供達が遊んでいる光景を目にした。「そういえば中学の時の同級生にも一人貧乏な家の子が

いたな」藤塚はその学友の家に行ったときに、時分の家もそれなりに貧乏だと思っていたが、彼の家に比べればまだ豊かな方だと実感して帰ってきたのを覚えている。山手線の中の新宿区内でもそういうところはあちらこちらにあったわけである。

ただ中学の時にはそれを、社会のひずみとして認識していなかったわけである。それがこの放課後の路地裏探索により、彼は「よく分からないけど何かが間違っている」という認識を深くさせた。そんな彼の目に入ったのが、赤旗の翻る新聞部のボックスであったわけだ。この赤旗は、単にかつてはこのボックスが学校での学生運動の拠点だったなごりということらしいと、それは後で分かったが、部そのものも新聞の定期発行も無論活動の中心だったが、それと合わせて、左翼思想の勉強会も重要な活動であった。それなりに先輩達、特にOBは左翼思想の持ち主だった。

藤塚は最初は興味本位で覗いただけだが、先輩から、さらにはOBの先輩からいろんな話を聞かされるにつれて、彼は社会を正しく見る目を養うということの重要性を認識するようになってきた。すると何となく体感していた今の社会のひずみを、理論的にも少し理解できるようになってきていた。OBの先輩から「私達が活動していた頃はいつ機動隊が学校内に乱入してくるかそれはもう毎日が不安だったのよ」と聞かされて、当初はこの赤旗の持つ深い意義が分からなかった彼だが、活動を通じて自分が何をすべきなのか漠然と見えてくるに従って、この赤旗がなぜか誇らしく思えてきて、新聞部活動はいつしか彼の新大久保探索と並び、彼の青春時代を支えるのに必要不可欠なものとなってきていた。「君達はスイカになれ」とOBからいつも言われた。外見は安全な緑色でも、中身は真っ赤赤になれということだ。OB達は連日の如く部室にやってきては藤塚たちにマルクスレーニンの著作について熱く語った。藤塚は新宿の本屋で社会主義哲学経済関係の本を買いあさっては読み通すと言う毎日を過ごした。しかし皮肉なことにそんな彼の行動、言動が、「あいつは少し変わっている」と、クラスの中では彼の孤立感を結

果的にはますます深めてしまったのであつた。充実感、満足感もあり、しかしその対極には疎外感もあり、寂寞感もあり、藤塚は心の分裂を感じながら、それでも何とか学校生活を過ごすと言つ毎日を送り続けるのであつた。

第五章

六月も終わりに近づいた。月曜日、朝、藤塚は高田馬場の駅に降り立つた。長く続いた雨が今日は一休みで、青空が広がっていた。

「さて今日は久しぶりに路地を通るか」藤塚は登校路を大通りから例の路地へと歩むことにした。というのもとても狭い路地であつたため、傘をさしての歩行が厄介で人とすれ違うのも大変だつたので、梅雨の季節に入ってからはそのを通らないようにしていたからである。大通りの歩道はアーケードがあつて、傘をさす必要が無かつたということも一因ではあつた。また、彼の憂鬱な心情がこの時期にはかなり改善していたということも、無論要因としてあつたかもしれない。いすれにせよ久しぶりの路地裏との対面であつた。

「何も変わらないな」

懐かしの裏通学路であつた。いつもの古ぼけた塀、見慣れた家の玄関、電柱に貼られたチラシが彼に微笑んでくれているようにも見えた。

「まあ、ここに俺の友達が俺を待っていたってわけか」

そんなことを思つて藤塚は苦笑いをした。「御免な。これからはなるべくここを通るようにするよ」と、彼らに挨拶を返しながらどんと見慣れた道を進んでいった。藤塚はほつとしたような、癒されたようなそんな心持で足取りも少し軽くなったように感じた。そんな路地もいよいよ終焉に近づいた。「そろそろあのアパートだな」路地から一段低地に広がるあのアパートはどう迎えてくれるだろうか？そんなことを考えているうちにアパートの前までたどり着いた。視界が開けた。目にアパートの庭が飛び込んできた。

「あつ！」

彼は感嘆の声を上げた。例の殺風景な庭が、今日は全く違う表情で彼を迎えていた。

「何てきれいなんだ」

紫陽花の花が庭一面に咲いていたのである。あの雑然とした庭が、今や色とりどりの紫陽花に彩られ、古ぼけたアパートとは全く対照的な華やかさで彼の目の前に広がっていた。

藤塚は思わず路地からアパートへと続く鉄製の階段を下り始めた。紫陽花の花に吸い寄せられるかのように彼は庭へと降り立った。近くに寄ると紫陽花の美しさは一際際立つて彼の視覚を刺激した。彼はそのまま暫し時を忘れて佇んでいた。

今までにこの花を見たことが無かったわけではない。しかしそれほど一面に咲き誇る紫陽花の群生を見たことは無かった。よく見るとその一つ一つが微妙にその表情を変えて彼を出迎えてくれている。自己主張の強そうなものもあれば、ひっそりと美しさを隠そうとしているものもある。包容力豊かに彼に迫ってくるものもあれば、いかにも頼りなげで思わず抱きしめてあげたくなるものもあった。「姉のようでもあり妹のようでもあり……」とふと藤塚は感じた。男二人兄弟で兄しか持たなかった彼にとつては、そのようにも見えたのも決して不思議なことではあるまい。孤独感を依然として払拭できない彼の心に、この圧倒的な美の乱舞は大きな安らぎを与えてくれた。「いつまでもここにいたいものだ」とそんな考えが脳裏を横切った、その時であった。背後からの声に彼は我に返った。

「どうかしたの？」

女性の声だった。藤塚は驚いて振り返ると、そこには年のころ二十台の後半であろうか、細身の女性がにこやかな表情で彼を見つめて立っている。

「……」

咄嗟の事で言葉の出ない彼の心のうちを知ってか知らずか、彼の返事を待つことなく彼女は一方的に言葉を続けた。

「きれいでしょう、ここの紫陽花。私も大好きなんだ」

そう言うと、彼女は藤塚の前に進み出て、花の一つに顔を近づけるとその匂いを嗅ぐ仕草をした。彼の横をすり抜ける時に、香水の香りであろうか、何とも芳しい？女？の匂いに藤塚は一瞬めまい感を感じた。彼女は花から顔を離すと、藤塚には背を向けたまま話を続けた。

「でも、不思議、本当この花って。そうでしょ、こんなにきれいなのに匂いはそうでもないの……。ただ見られるだけでいいのかしら？それで満足なのね、きつと」

と、そこまで言うとな彼女は藤塚の方を振り向いた。彼女を真正面から見る事になった藤塚は、相変わらず微笑を浮かべて彼を見つめている彼女に対し、どんな表情で対すればいいのか分からずただおどおどした表情で彼女と向かい合っていた。

背は藤塚と同じ位であった。細身の体で、髪は長髪。一言で言えば美人と言うべきか、整った顔立ちをしていた。赤のミニのワンピースがとても似合っていて、色白の肌がさらに目だって美しく見えた。その赤と白のコントラストが、さらには背景の色鮮やかな紫陽花の群生と新たな対照をなして、その強烈な視覚への訴えが藤塚をめまいに誘い込んだ。彼は金縛りにあったような感覚にうろたえながらも、ただその場に立ち尽くすべく、倒れないように必死に踏ん張っていた。

そんなこととは当然知る由もなく、そうしてただ黙っている藤塚に、ついに彼女もさじを投げてしまったようだ。

「それじゃあね。私は仕事帰りで疲れてるの。あなたは学校へ行く途中でしょ。遅れるわよ……。まだ若そうだから早稲田大学の学生さんじゃないわね。〇〇高校の学生さんかな？私服だからそうよね？〇〇高校の学生さんならきつと賢いんでしょ！頑張って勉強なさいよ」

そう言い残すと彼女は再び藤塚の横をすり抜けると、そのまま背を向けてアパートの中に入ってしまった。古びたアパートに不釣り合い

な彼女の派手さにも、何か今起こっていることそのものが現実のことでないような気がして、藤塚は暫し夢見心地で彼女の後姿を見送った。

彼女の後姿がアパートの中に吸収されてしまうと、藤塚は我に返った。

「確かに遅れるよな！」

学校へ行く途中なのだ。遅刻はしたくない。彼は紫陽花たちに別れを告げ、学校へと急ぐべく路地を足早に歩んだ。

「また見に来よう！」

それは紫陽花が目的であることは勿論であつたが、そう考えた瞬間、彼の心の奥深くであの女性の笑顔が渦を巻き始めた。「不思議な人だつたな」藤塚は彼女にももう一度会えるものなら会いたいなと素直に感じた。「でも会えるだろうか？」そんなことを考えながら登校路を急ぐ藤塚の足取りはいつもより軽やかに見えた。学校に着いてからも、その日は一日あの彼女の姿ばかり脳裏に浮かんで来て授業に集中できない藤塚であつた。

第六章

その日から彼は登下校の際は必ずそのアパートの前を通るようにした。紫陽花を見たかつたことは勿論であるがあ的女性ともう一度会えれば、という漠然とした願いもあつたことはもはや自分でも否定するつもりも無かつた。

ことあるごとに彼女の笑顔が思い出される。授業中も、部活中も「会いたいな」と常に心の中で願う日が続いた。

しかし、その女性には会えない日が続いた。「確か、仕事の帰りとか言つてたよな……」朝に自分のアパートに帰ってくる女性で、派手な服装をしているとなれば、どんな仕事をしているものなのか大体は想像は出来た。「多分夜の仕事の人だろう」藤塚はそう考えたが、新大久保から新宿近辺で良く出会う、明らかに「水商売」と

わかるタイプの女性とは違って、彼女は何とも言えぬ穏やかな優しい表情で、「水商売でなければ何の仕事だろう？」と、そんな謎めいたところも藤塚の心を捉えて離さない。一見した所明るい女性のように見えて、「ただ見られるだけでいいのね、それで満足なのね」と語った、彼女の語り草が何とも寂しそうなように思い出され、そんな暗い影が見え隠れするところが謎めいて、藤塚の心を完全に捕らえてしまっていた。

「紫陽花みたいな人だ」

毎日出迎えてくれる紫陽花を見ながら、藤塚はそんなことを考えるようになった。派手なようで落ち着いても見える。美しさを誇っているようで実は寂しげにも見える。見る人を包み込むように和ましてくれるようでいて、実は「本当はね、私は寂しいの。お願い、私を優しく包みこんで下さい」とひっそり語りかけているようにも見える。

「紫陽花って本当不思議な花だ」

藤塚は毎日このアパートの庭を訪れるうち、いつしか紫陽花の花に彼女の姿を重ね合わせながら鑑賞するようになっていた。

そんな「彼女に会いたいな」という藤塚の思いが通じたのであるうか。一週間ほどたったある日の夕方の下校時であった。

いつものように路地から階段を使いアパートの庭に降り立った彼は、アパートの二階のある一室の窓から自分に向かって手を降っている女性の姿を確認した。「彼女だ」そう思うと嬉しくもあったが、とつさにどうしたらいいか分からず、彼はぺこりとお辞儀をした。すると彼女がそんな彼の動作が可笑しかったのだろう、にっこり微笑みをこちらに向けるのが見え、次には窓から姿を消した。「あつ」と思ったが、藤塚はどうしたものか分からず、そのままその場に立っているしかなかった。するとアパートの玄関から彼女が出てきた。「こんにちは！学生さん。また会ったわね」

そう言いながら彼女は彼に近づいてくる。藤塚は顔が真っ赤になっってくるのが自分でも分かって、その場から逃げ出したい気持ちで

あつたが金縛りにあつたように体が動かず、口も開けない状態であつた。彼女は今日は前と違って、一転、清楚な感じの落ち着いた濃紺のワンピースに身を包んでいた。化粧はやはり薄めで、今から「水商売の」仕事に行くにしては控えめないでたちとも言えた。ただ彼女が近づいてくるとやはり香水の香りが漂い、その圧倒的な女性の匂いに藤塚は動悸で胸が苦しくなるのを感じた。黙つたままの彼に、彼女は優しくこう語りかけた。

「変わった人ね。全然喋らないのね……。私が怖いのかな？何にも怖くないわよ！まあ、いいや。私は仕事だからもう行かなくっちゃ。じゃあね」

と言うと、彼女は藤塚の横をすり抜け、路地へつながる階段まで歩いていった。藤塚は呆然とそれを見送るしかなかったが、すると彼女は階段の途中で急に藤塚のほうを振り返ると、にこりと微笑んで彼にこう告げた。

「またおいでよね！今度はゆっくり何かおしゃべりしようね」

そう言うのと再び背を向けてそのまま彼女は路地の右手へと立ち去つた。彼女を見届け終わると藤塚の心の緊張は漸く次第にほぐれていった。藤塚は今の自分が紫陽花に魅了されているのか、それとも彼女に魅了されているのか？常に心に問いかけていたが、今、彼女から優しい言葉を最後に投げかけられたのが何ともうれしく、次第にすがすがしさが心に満ちてくると、もはや答えは明白だと悟つた。「これはやっぱり……」

？恋？だ。そう悟つた藤塚は何かほつとした思いで、今や体の緊張もほぐれた。彼は大きく背伸びをした。そして紫陽花の花の一つにこう語りかけた。

「また、来るよ！」

藤塚は軽い足取りで下校路に戻つた。これほどの軽い足取りは久しぶりだ。彼は「またおいでよね！」という彼女の言葉を繰り返し心の中で反芻していた。「会いたい！」彼の頭の中は今や彼女の微笑みに占領されて、他の何事も考えられない状態であつた。

ほとんど夢見心地で彼は帰宅した。その夜は彼女の笑顔が夢に現れ、高校入学以来しばらく苦しい夜を過ごしていたことが嘘のように、その日の夜は良く眠れた。次の日、藤塚は久々に心地よい朝を迎えることが出来た。

第七章

藤塚が生まれ故郷の大阪から東京へ引越してきたのは一九七〇年、彼が十三才の時である。中学一年になってすぐに引越しが決まった。事情は良く分からなかった。何でも、東京で事業に成功した親族が、父に東京で一緒に仕事をしてみないかと誘ったらしい。父も貧乏生活からの脱出を夢見たのだらう。親族の誘いに乗っての上京となったのである。

生まれて始めての東京であつた。新幹線で東京に着いた時の驚きは半端なものではなかった。「どうしてこんなに大きいビルばかり建っているんだ？」正直驚いた。大阪にいるころ、時に梅田の阪神百貨店に行くのは、彼の家の貧しい暮らしから考えれば大変な贅沢であつたが、それでも当時梅田の周辺には高いビルディングもなく、彼は都会と言ってもそれ位のイメージしか持っていなかった。それがどうだらう！目の前には延々と高層のビルが続いている。それも大きさは梅田の阪神百貨店、阪急百貨店の比ではない。

街を走る電車にも驚いた。東京駅に降り立つと、実に色とりどりに塗りわけされた電車が、可愛いおもちゃのように走っている。大阪の環状線の暗いイメージとは程遠い、何か、子供心に夢にあふれた街のような気がした。「ここなら何か運命を変えられるのかもしれない」子供心にそう感じた、同じことを父も感じたに違いない。父は東京へ来てから、その親戚に任せられた仕事をそつなくこなして、藤塚家の生活は彼が高校一年の今では、結構豊かになってきていた。

その頃、父と同じように一攫千金、立身出世を狙って数多くの人

が東京を目指して列車に乗ってやってきたに違いない。藤塚は東京に住んで三年、高校生となって、活動する範囲が広がったことや、新聞部に入り社会の複雑な仕組みを学ぶようになったことで、この街がいかにも多くの人々の夢をかなえたかを理解すると同時に、その反面、対極でいかに多くの人々を苦悩のどん底へ突き落としたかということも理解できるようになっていた。左翼思想に染まると言うことはなかったが、新聞部の活動を通じ、ある程度、左翼的な思想に理解を深めていった。そんな活字を通じての理解の対極に、彼が肌を通して感じた、自らの目を通じて見た社会の姿があった。

「彼女も夢を求めて東京へやってきた人だろうか？」

「彼女はこの東京で夢を実現出来たのだろうか？」

高田馬場の安アパートに暮らす、夕方出勤、早朝帰宅の謎の女性に思いを馳せる藤塚は、そんなことに思いをめぐらせながら、「どうしたらまた彼女と会えるだろうか？」と思索しながらの毎日を送るのであった。

第八章

「どうしても会って話をしたい」藤塚はどんより曇った梅雨空を眺めながら、六月も終わろうかというある金曜日の朝、自宅のアパートで弁当を自分で作り終えると、やはり片時も忘れられない彼女のことを考えながら、学校へ行く準備を整えていた。

弁当を自分で作るようになったのには訳があった。

両親は東京へ呼ばれる際、その親族から居酒屋の経営を任されていたので、東京へ来て以来、夫婦で年中無休で働いていた。帰宅はいつも深夜三時頃である。当然、藤塚が学校に行く朝はまだ二人とも寝ている。朝食は自分でパンを焼いて食べる。夕食は母が作ってくれた料理をフライパンやら鍋やらで温めなおすという日常を送っていた。それでも中学の時は学校給食があるのでまだ良かったが、高校になると昼食が弁当持参になった。これが辛かった。なぜかと

言つと、クラスの殆どの級友が母親手作りの弁当を持参してくるのに、藤塚はいつも学校の購買部でパンを買うのだ。当然いつもパンばかり食べている藤塚は自分への級友からの視線を感じる。彼がクラスで孤独感を深めたのには、こんな些細なことではあるが、それでも思春期の多感な青年を悩ますのに十分なそういう出来事も関係していたわけである。

「貧乏からやつとのことで脱出していたと思つていたけど、まだまだ我が家は貧乏なんだ」夫婦共稼ぎと言うのは普通ではないのだ、ということに今更ながら気がついた藤塚であった。しかし彼はすぐに対処法を思いついた。調理に手馴れていた彼は、弁当を自分で作ることを思いついたのだ。東京へ来て以来、自宅では殆どの時間を一人で過ごさねばならなかった彼は、自然と、危機管理の対処法を自ら学んでしまっていた。「自作でも何でも弁当を食べていると好奇心に満ちた視線にさらされなくて済む」そう思つて実践すると、級友からの視線をあまり感じなくなった。作戦成功であった。しかし同時に寂しい思いにも捉われた。「皆お母さんが家にいてお弁当を作ってくれるんだなあ」そう思うと級友達が羨ましくもあったが、その一方で彼はこうも考えた。「でもそうすると僕より貧乏な家つてのは一体、この東京でどんな生活をしているのだろう。僕と同じ立場の高校生はどんな惨めな毎日を暮らしているのだろう？」「どんなよりした空を眺めながらそんなことにも思いを馳せると彼は心が痛むのを感じた。いつもならこんなことを考え始めると、社会の不公平さとか貧富の格差とか、そういう方向に考えは進んでいくのだが、何故だろうか？今日は違った。思いは突然、紫陽花と彼女の方に飛んだ。突然あるアイデアがひらめいたのだ。

「そうだ日曜日の夕方に行つてみよう」

我が家の両親も共働きた。水商売だ。年中無休なのは、お店が秋葉原にあつて、日曜日も客足が絶えないからである。しかし、たまに日曜日に両親の店に遊びに行くことがあるが、近くにあるスナックやバーといったお酒が専門の店は日曜日には殆ど営業をしていな

いということに気がついていた。ならば、

「彼女が勤めているところもそうなら、日曜日の夕方は休みのはずだ」

そう自分で勝手に結論付けると、彼とて緒戦はやはりまだまだ未熟な高校一年生に過ぎなかった。社会の矛盾の問題は完全にどこへやらへと飛ばされ、心には晴れ間がさしてきた。「そうだ！この作戦で行こう！日曜日の夕方にアパートに行ってみればいいんだ！？」彼はそう心の中で叫ぶと、まだ休んでいる両親を起こすまいと、そつとドアを閉めて、いつものように学校へと向かった。「この作戦はきつと成功するぞ」そう考えると期待に胸がわくわくしてきた。そんな彼を励ますかのように、久しぶりに雲間から太陽が顔を出した。まぶしい太陽に彼は彼女の笑顔を重ねて思い出していた。まぶしい視線だった。

「明後日の日曜日には会える」なぜかそう確信出来た。「彼女はどんな人生を送ってきたのだろうか？」わくわくした気持ちはおさまることを知らず、彼は軽い足取りで高田馬場へ向かうべく地下鉄の階段を一気に駆け下りた。

第九章

日曜日、作戦決行の日が来た。「出会えるとしたら六時以後か？」漠然とそんなことを考えながら、早めに家を出た。日中も良太は一人である。誰も彼の行動を監視する者はいない。

実は藤塚には兄が一人いたが、大阪の親戚の家に世話になっていて、良太とは別に離れて高校生活を送っていた。大阪の有名進学校に通学していたため、転校するのは将来の大学進学に不利と周囲から意見をされ、最終的に親子で話し合った結果、高校卒業まで大阪に留まることにしたのである。

良太には、その結果一人っ子として、家で一人の時間を過ごさねばならぬはめになったわけだが、時に寂しいと思う反面、それが自

立心を大いに育てたことも事実であつた。さらに言うと、一人が気楽のことでも多かつた。実際、今日の日曜日の自分の行動を「どこへ行くの？」と干渉する人間は誰もいないのだ。

浮き足立つてしまい、いても立つてもいられず、彼はわざと早めに出たのであつた。どこかで時間は潰せばいいと思つた。「家の周りでも久しぶりにぶらぶらしてみよう」彼のアパートは神楽坂の近くにあつた。中学は神楽坂とは反対方向の、牛込という閑静な住宅街にあつたために、神楽坂の方は中学生心に飲食店が多い所ぐらゐにしか思つていなくて、考えてみるとゆつくり歩いてみたことは無かつた。「一度ゆつくり歩いてみるか」彼はいつもの地下鉄の駅を通り過ぎると、そのまま神楽坂の繁華街の方へ足を運んだ。

「なるほど」

高校生の目から見るとまた、そこは違つた雰囲気を持つて見えた。「意外と歴史がありそうだな」路地に入つていくと由緒ありそうな料理屋さんらしき建物が目に付いた。そこには彼が普通に利用するようなレストランや食堂にあるような値段表やメニューなるものは掲げられていない。「きつと高いんだろうな」夜、たまたまではあるがこの界限で芸者さんの姿を見たことを彼は思い起こした。「お金持持ちの人たちが夜遊びに来るんだろうな」ここはここで歓楽街なのだ。藤塚は新宿の歌舞伎町を思い起こした。「歌舞伎町方面へは足を踏み入れないように」と言われた一方の歓楽街は中学生には危険な場所と注意をされていた。しかし、「神楽坂には行かないように」とは言われなかつた。新宿歌舞伎町がどんな所なんだらうという疑問は今や解けていた。無論全容を知つたわけではない。そして対極にここがあつた。

大人の遊興にも対極があるのだ、藤塚はそんな当たり前のことを、目の前のいかにも老舗ですと言わんばかりの立派な門構えをしている大きい料理屋の前を通りながら、あらためて認識した。すると次には「彼女はどんな仕事をしているのだらう？」と、彼女のことが気になり始めた。そこで時計を見た。まだ四時であつた。

「まだ時間が早いな」

かなり歩いたせいか少し疲れた。「少し休もう」神楽坂の赤城神社の境内に入ってベンチに腰掛けた。家族連れやアベックで境内は結構賑わっていた。ここでも紫陽花はそこかしこに散見されたが、藤塚の目から見ても、神社の朱塗りの建物にもそぐわなく、美しいと思えるほどの価値は無かった。彼の心はするとすぐにあのアパートの紫陽花の元に飛んでいた。次に自然と彼女の姿が思い出された。

「会いたい」と思ったその瞬間、心地よい風が境内を吹き抜けていった。藤塚はふっと我に返った。「早く行こう」早く着きすぎてもいい、いやむしろ早めに着かないといけないんじゃないか？そう思うとぐずぐずしていられなかった。藤塚はベンチを離れた。今年の梅雨は長雨が続いていた。湿度も高く、今日も今にも雨が降るかもしれないといった空模様であった。傘も持って出ていた。準備は万端であったが、「雨の降らないうちに」という思いもあった。

彼は地下鉄の駅方向へ足を向けると神社を後にした。日曜日であったが、この赤城神社界隈は多くの人で賑わっていた。商店街もあり出店も出ていたりで家族連れで買い物に来る人も多かったからである。

多くの人を眺めながらの街歩きに藤塚はこの頃ではある種の快感を覚えるようになっていた。表情を読んだり、その人の人生に思いを馳せたりと、彼の想像力は無限に膨らませることが出来た。瞬間移動してその人の体の中に入っていくという感覚である。そうすると周囲の景色が全く違った見え方で彼の視界に入ってくる。浮遊感というのだろうか夢見心地というのだろうか、そんな現実離れたような心持になれる雑踏は彼を飽きさせることはなかった。時には空中を漂うことすら出来た。一時間でも二時間でも彷徨いながら歩き続けることが出来た。

「でも、今日は急こう」

彼は神楽坂の駅を目指して行った。気持ち切り替えた瞬間、彼の心はもうすでにあのアパートの庭に舞い降りていた。

第十章

高田馬場駅から地上に出ると雨が降っていた。藤塚は傘をさすとアパートへと一目散に歩いていった。

アパートへはすぐにたどり着いた。「さあ、いよいよだ」ただ、意気込んで、そうしてたどり着きはしたものの、庭へ降りる階段の手前で彼は歩みを止めてしまった。「さてどうしよう」逸る心でここまで来たものの、さてこの後どうしたいのか途方にくれてしまったのである。「どうすれば実際会えるというんだ？」まったく見当がつかなかった。

「えーい、ままよ」

ともかく庭へ降りてみよう！そう決心すると彼は階段を下りた。すると庭も紫陽花もいつものように彼をにこやかに出迎えてくれた。今や彼の馴染みの場所と化していたので当然と言えば当然であるが、それでも彼はうれしく感じた。クラスでも、部活動でも、心からの癒しの微笑を彼に向けてくれる人はいない。クラスでは孤立、部活動は激論を交わすのみの毎日である。「考えてみると、本当に彼女だけだ、僕に優しく微笑んでくれたのは」そんなことを考えながら紫陽花を眺めていたら、紫陽花の花が不機嫌な表情を見せたように思えた。「君もだったね、紫陽花さん！忘れてないよ、ありがとう。本当にきれいだな」藤塚は慌てて紫陽花たちにもお礼を言った。一斉に咲き始めてからほぼ毎日ここを通って眺めているが、彼女達も日毎に美しくなってきたように、藤塚の目には映った。「そうだよね、僕の妹、お姉さんってとこなんだから。無視したわけじゃないよ。君達も本当、僕をなぐさめてくれてありがとう」と、内心感謝の気持ちを花達にも伝えながら、庭を少し歩いた時だった。アパートの二階から大きい声が聞こえてきた。男の声である。なにやら興奮した感じで、怒声といった方が正確かもしれないくらい荒々しい感じの声だった。はつきり中身まではわからぬまま、その声の

する方を見て、藤塚は全身が凍りついた。「あの女性の部屋だ」間違いない。男が窓に背を見せているのが見える。その男が発する声であることは疑う余地が無かった。「何があつたんだ？」藤塚は混乱した頭を落ち着かせると、状況を整理した。「彼女が誰か男性と喧嘩をしているのだ」当然ではあるが、そう結論を導いた彼だが、そうであればそうであつたで何をなすべきか全く検討がつかずただ茫然としているしかなかった。彼は歯がゆさを覚えながら、アパートの二階で行われている二人の、おそらくは？喧嘩？をガラス越しに眺めているしかなかった。耳を澄ましていると、男性の怒声に混じって女性の鳴き声が聞こえてくる。「彼女が泣いているんだ」そう思うと、藤塚は悲しみと、さらにはなぜか怒りの感情が続いて沸き起こり、胸が一杯になつて我慢できず、アパートの方へ走り出した。

「助けてあげなきゃ！」

そう本能的に思ったのだ。無我夢中だつた。するとアパートの入り口で男と出くわした。かなり興奮した様子だ。「さっきの男だ……」と思う間もなく、男は藤塚に一瞥を与えるとそのまま走り去つた。藤塚はその後姿をなす術も無く見送るしかなかったが、男が見えなくなつて、我に返ると、いやな予感が頭をよぎつた。「まさか彼はアパートの二階に上つた。そして……」

その後のことは実は彼も良く覚えていない。気がつくとは彼は女性の部屋のドアを開けていた。後は映画の場面を見ているようであつた。女性が窓の傍らでうずくまっているのが見えた。彼女が前のめりになつて倒れこんでいる畳には包丁が投げ出され、周囲が血で染まっていた。

何事が起こつたのか？冷静に考えれば明らかなことであつたが、混乱した彼の頭は状況をすぐには理解できず、彼は暫し茫然と立ち尽くした。沈黙の空間で、畳の赤い部分が徐々に広がりを見せていく。

その沈黙を破るかのように、突然雨が激しさを増して窓ガラスを

強く打ち付け始めた。その雨音が部屋の中にピシリピシリと強く響いた。大音響のように彼の耳には響いた。その音で彼は我に返った。激しい雨音が部屋の中に響いている。ガラス窓が割れるのではないかと感じるほどの強い雨であった。目の前に彼女が血に染まった畳に倒れこんでいるのが見える。これは夢でも何でもない！現実と間違いない。そう思った瞬間彼は叫んでいた。

「救急車だ！」

そう叫びながら藤塚は部屋へ飛び込んだ。「電話だ！」本能的に彼は部屋の中の電話を探した。しかしそれらしいものはない。彼は部屋を飛び出すと、隣の部屋のドアを激しく叩いた。

「助けてください！」

その後のことは無我夢中でよく覚えていない。目の前で展開される出来事は、今度は早送りの映画のようだった。救急車のサイレン、担架を持つ救急隊員、運び出される彼女、事態は急速に展開した。しかし運び出される彼女が彼の傍らを通る時だけは、彼の目にはそれがまるでスローモーションの映画を見ているように映った。担架で運び出される彼女の表情がはつきりと見えた。何と悲しげでありながら、それでいて美しい表情だろう！時間が止まればいいなと藤塚は思った。その瞬間である、彼女が目を開けて彼に微笑を見せた、と少なくとも彼にはそう見えた。

「行かないで」

と思った次の瞬間、彼は現実にまた引き戻された。「バン！」と言う音で、藤塚は我に返った。救急車の後ろのドアが閉じられたのだ。彼女が救急車に搬送されたのであった。

映画は幕を閉じた。

救急車のけたたましいサイレンの音が鳴り響いた。藤塚は雨の中、一人アパートの庭に取り残されていた。傘もささず、ずぶ濡れであった。

「大丈夫だろうか」藤塚は経験したことの無い事態に、ただおろおろするばかりで、今から何をなすべきなのか、そもそも彼女の身に

何事が起こったのか全くわからないでいた。そのままそこに立ち尽くしていた彼だが、しばらくすると雨は元の小降りになって、さらについてには完全に止んだ。「止んだか……」彼は大きくため息をつくと、空を眺めた。晴れ間がのぞいてきた。夕陽が差し込んでくる。まだ明るかった。続いて彼は視線を庭の紫陽花に向けた。雨に打たれた紫陽花は夕陽に照らされきらきらと輝いて一層美しく見えもしたが、花から滴り落ちる雨のしずくを見て、その表情が彼女の涙顔に重なった。すると彼の目からも自然と涙が滴り落ちてきた。

「大丈夫であってほしい」

すると次には畳に染み込んだ赤い血の記憶が蘇った。すると、ますます涙が溢れ出した。どうしようもなく暫く涙を流れるままにしていた彼だが、こうなってしまうてはもはや自分には何も出来ないのだと悟るとアパートを後にした。

どうやって家にたどり着いたのか、よく覚えていない。思い足取りであった。彼の見えるものすべてが白黒の映像と化していた。いやより正確に言えば、灰色一色であったと言うべきか？すべて色彩を欠いていた。そんな夢見心地の状態のまま、自宅へ到達すると彼はばたつとそのまま寝込んでしまった。彼女のことを思い出すと涙が出た。目を閉じると脳裏には畳みの鮮血が繰り返し現れ、彼を苦しめた。そのまま食事も取らず、床に入った彼だが、結局眠れないまま一晩を過ごした。

第十一章

「彼女は無事だったろうか？」事件の後、毎日藤塚はそのことばかり考えていた。そして毎日アパートの前を通った。登校の際にも下校の際にもである。しかし彼女の姿は見えなかった。また、庭に面した彼女の部屋の窓にも必ず視線を向けたが、人のいる気配はなかった。カーテンが閉じられたままであった。翌日の新聞を見たが事件のことは出ていなかった。

彼女のいない寂しさと彼女がどうなったのかという不安感を紛らすために、彼はそのまま路地を通り過ぎるのではなく、アパートの庭に降り立つと紫陽花の花を眺めて暫しの時間を過ごした。しかしそうすると事件のことが鮮明に思い出され、その辛さに涙ぐむという毎日であった。

梅雨も終わろうとしていた。紫陽花の花も美しさは盛りを過ぎつつあった。もう今しか輝けないと思うのだろうか、花達は精一杯最後の美しさを出そうと競い合っているようにも見えた。

「どうして今までこの花の美しさに気がつかなかったのだろう」顔を近づけてキスしたくなる衝動にすら駆られる。何かを語りかけたのだろうか、息遣いすら感じる。「私の美しさを忘れないでね、また来年会おうね」藤塚はそんな花からのメッセージを感じながら、そうやって暫くは心を慰めているのだが、やがては、その花の一つ一つに彼女の元気だった時の笑顔が重なり、いたたまれない思いになってくる。「この花が散ってしまうように彼女も死んでしまうんだらうか？」そう考え始めると、不安感で頭の中は混乱し始める。そうなると、「いつそ119に電話して、搬送された病院を聞いてみようか」などと、いろいろ考えもするのだが、誰に尋ねたところで、どれも一笑に付されるに違いなかった。「そもそもあなたは一体あの人と何の関係があるんですか？」そう聞かれればたちまち返答に窮してしまうだろう。アパートの住人に尋ねても同じ反応であろう。そう考えるとアパートのドアの一つ一つを叩いて回る勇気も無かった。

こんな毎日が続くうち、梅雨も明けた。紫陽花の花も色あせて次々と散っていく。あれほど美しかった紫陽花のそんな運命を見ると、いやな予感が藤塚の頭の中に湧き上がってくる。「彼女は一体どうなったんだらう？」道行く人々が、うつとうしい梅雨に別れを告げ到来した夏を楽しもうと、浮き足立って見えるのに、彼の心は依然として梅雨の暗い空模様のままで、まったく晴れ間が見えてこなかった。重い心はアパートへ向かう足取りをさらに重くした。

「もう会えないのか」彼はそれでも諦めなかった。「それでも行かないや」彼はほぼ連日アパートを訪れた。しかし彼女の気配は全く無い。ついには、彼女のドアの部屋をノックすることも試みた。しかし何の反応も無かった。毎日こうして通いつめていたので、つい廊下で誰かとすれ違っても変な目で見られ、彼女の安否を聞けるような雰囲気でもなかった。いや、仮に聞いたとしても誰もが「知らないよ」としか答えなかったであろう。ここは東京なのだ！古くからの住人が住んでいる下町なら違ったであろうが、このアパートの住人は明らかに皆が無関心を決め込んでいた。「駄目か……」結局彼女のいないことを確認してため息をつくことの繰り返しだった。

梅雨明けの明るい世界も、彼の視界では？鈍い？色のままで推移する毎日であった。

とうとう夏休みに入った。「どうしよう」休み中も毎日訪れるベキかどうか？そんなことを考えながらいつものように帰宅すると、郵便受けに自分宛の手紙が届けられていることに藤塚は気がついた。「？」

彼が驚いたのも無理は無い。裏を見ると差出人が書かれていない。宛名の筆跡を見るといかにも優しさが感じられ、女性からだなと藤塚は直感で思った。

「誰からだろう」

玄関に入るや否や、彼は早速封を開けた。便箋を取り出すと玄関で立ったまま、彼は急いで手紙を読み始めた。

第十二章

「お元気ですか。藤塚君というのですね？あなたの住所と名前は救急隊員の方が教えてくれました。これはお礼の手紙です……」

彼女からだ！「無事なんだ！」藤塚は心から喜ぶと同時に、手紙を持つ手が震えるのを感じた。「そう言えば……」藤塚は現場で救急隊員から住所と名前を聞かれて教えたことを、今になって思い出

した。彼はともかくもほつとすると、安心感から来る脱力感からもあつて、玄関に座り込んでしまった。そしてそのまま、ただひたすら夢中で手紙を読み続けた。

「……先日は本当にありがとうね。あなたが来てくれなかったら私はどうなっていたか、今でも思い出すと怖さで身が縮みます」

「……ともかく、何から話したらいいかしら。救急車が早く現場に到着したから助かったんだと、お医者さんから言われました。本当にあなたのおかげ。ありがとう。連絡を受けた母が田舎から飛んできて、三日後だったかな、退院が決まると、結局私をそのまま実家へ連れて帰りました。さからえなかったわ」

するともう会えないんだろうか？ 藤塚は、今度は寂しさを覚えたが、その気持ちをぐつと押し殺すと、彼はさらに手紙を読み続けた。「……で、この手紙は実家で書いてます。何年ぶりだろう？ 私の家の周りには昔と変わらない田んぼが広がっています。皮肉だね。この田舎生活がいやでここを抜け出して東京へ行ったのに……。でも今はこの眺めが私を癒してくれてるの」

「……東京ではもう暮らせないと、母が私を監視しています。逃げられないわ。でもね、実際、私も東京で生きる自信を無くしたしね。これからは母子で助け合つて、ここで生きていくしかないのかな……」

そうだったのか。藤塚はとりあえずは親子で平穏な生活を送っているのならともかくもいいことだ、と安堵した。彼は手紙を読むのを一旦中断し、玄関から自分の部屋へ移動した。彼は机に座ると、さらに手紙に向かった。ボールペンではあるが優しい筆跡が彼の心を和ませた。彼女の笑顔がありありと思い出された。

「……でも、そういう気持ちはあつても体がまだ言うことを聞かないの。」

実はね、前から病気なんだ、私。心の病気……。

元気な時はいいんだけど、時々自分が自分でなくなるときがあるの。何て言うんだろう。その繰り返し。小さい時からずっとそうだ

った……」

文面はさらに続いた。

「ともかく、ありがとうって言わないと。あの時ね、彼と喧嘩してたの。彼とはね、もう何年になるかな。最初は良かったんだけどね、でもここんところ喧嘩ばかりしていて、で、彼が、もう駄目だ、別れようってね。ずっと彼はそんなだったけど、私が諦め切れなくてね。それで私が取り乱したら、彼が私を罵りだして、そして頬を思い切り叩かれたの。そしたらね、彼の顔がいきなり憎い父の顔に化けて、小さい頃のいやな記憶が全部スライドを次々見るみたいに、頭の中に映写されて、そしたら、もう、ますます、私、取り乱してしまつて、それから、それから……」

「あとのことははっきり覚えていないの。彼が部屋を出ていった瞬間に世界が終わったと思つた。で、包丁を台所から持ち出して、で、後はあなたの方が良く知ってるよね。でもね、藤塚君、あなたがドアを開けて入ってくるのは実ははっきり見えたの。不思議ね。でね、それが何かすごくうれしかったの……」

ここまで読み終えると、藤塚の目に涙があふれてきた。勇気を出して部屋へ駆けつけて本当に良かったと改めて感じた。「そうだったのか」おおよその状況が漸く分かった。藤塚が何となく思い描いていた物語の展開そのままであつた。ただ、彼女に暴力を振るつたという男が憎らしく、「許せない！」と憤りを強く感じた。

「藤塚君には何でも話しちゃつて、素直になれる。どうしてかしら？私、自分でも分からない。お母さんにも彼のことは内緒にしたたのにね。病気のこともね。笑わないでね、馬鹿な女だって。でも、あなたは信頼できそうだから。紫陽花の花を見つめているあなたを見て、誠実そうな人だつて思っていたから……」

「こんな話嫌だよ？でも、もう少し付き合ってくれる？あなたなら本当何でも話せそうなの……。そしてね、こう書いてても心が安らぐの……」

「実は、あなたがアパートの庭から私の部屋を覗いているの、何回

かこそつと見ていたんだ。ごめんなさいね、ゆつくり今度は話そうね、なんて言っておいて……。でもね、部屋に閉じこもっている時って、とてもそんな気分じゃないの。さっきも言ったけど、私はすごく気分にもらがあるの。調子のいい時は、藤塚君も知ってるよね、外できやつきやつて騒いでるけど……。でも、落ち込むともう駄目なの……

「いや、落ち込むって言うか、何か違うんだな。自分が自分でなくなるの。すると気分が悪くなって、部屋に閉じこもっちゃうの。頭の中で何かがぐるぐる回りだす感じ。大抵は彼と喧嘩した後なんだけどね。ただ、落ち込むんじゃないってね、もう一日中夢を見ているような感じで、自分が何かお空に漂っているような、別の世界にいるような、すると、今度は逆に気持ちが悪くなって、いつまでもその世界から帰って来れないの。下を眺めると元氣なく横たわっている自分がある。ああ、惨めだなって。でも、いつまでも漂っていられない。また、自分のところに戻っていく、すると、恐ろしく不安な気分になり、誰かの気配を感じ、次にはいろんな人が実際に目の前に現れるの。現れては消える。中には話しかけて来る人もいる。大抵はいやな人ばかり、会いたくない人ばかり出てきたりする……。小さい時の自分が、今の自分と会話をしていたりする、それを後ろから、上から、違う自分が眺めている……

「ごめんね、つまらない話だね。実は精神科の先生にも診てもらったことがあるの。彼とまだ、うまく行ってる最初の頃にね、彼が心配してね、私を大学病院に連れて行つたの。そしたらね、？心の？病だって言ってた。？解離？だとか、？ヒステリー？だとか、いろんな難しい言葉を並べていた。薬もたくさん貰った。でもちっとも良くならないんだ……

「だからいつからか行かなくなっちゃった。彼はそんな私に愛想をつかしたのね。だから彼が悪いんじゃない、それも分かっているんだ。でも、でも、彼のことが好きだったから……。別れたくなかったから

……

「泣き言並べても仕様がなないよね。ごめんね。いやな話聞かせちゃつて。ともかく、これから母と二人でやりなおすしかないから、つて今は思っている。本当藤塚君にはありがとうって、こんな馬鹿な女の人のために部屋に駆けつけてくれたのね、本当にありがとう……」
「あなたは前途有望な〇〇高校の学生さんでしょ、頑張つて勉強してね……。そして素敵な彼女も見つけてね。私みたいな病人を好きになつたら駄目よ！じゃあね、お礼を言いたかったただだから、だから、名前も住所も書きません。それが、私のためでも、あなたのためでもあると思うから。でもね、あなたのことはずっと見守っています。お空からね。約束します。だって命の恩人だから。さっきも言つたでしょ！実はね私はお空を漂つて、行きたい所へどこへでも飛んで行けるの、信じてくれないかな？でも、本当なの。私の特技なんだ。じゃあね、本当頑張つて勉強してね、さようなら」
手紙はそこで終わつた。読み終わつたときには、藤塚の顔は涙でくしゃくしゃになつていた。「もう会えないのか」と思うと切なさで胸が一杯になった。あらためて消印を見ると、？滋賀県朽木村？ということだけは分かつた。

「滋賀県か、朽木村ってどんなところだろう」

ともかく無事で元気で暮らしてさえいてくれたら、藤塚はそう考えると、手で涙を拭つた。すると、彼の心を埋め尽くしていた暗雲にも漸く少しではあるが晴れ間が広がってきた。

「また、ひとりぼっちか」

藤塚は苦笑いをした。でも、以前の彼とは何かが違つていた。彼女の命を救つたのだという事実、さらにはそれによつて、もし彼女が生きる力を取り戻したのだとすれば、「俺も何かの役には立っているんだ」というそんな自尊心が、彼を逞しくしたのだろう。もはや？弱弱しい？一人ぼっちではない、名も知らぬ誰かではあつても自分を支えてくれる人がいる、そう思うと、なぜか孤独であつても「頑張れる！」と思つた。いや、もうすでに彼は孤独では無くなつたのだ。

「滋賀県朽木村に今俺も飛んで行ければな！」
そう心で叫ぶと、彼は手紙を大事にしまった。「宝物だ」彼は、孤独でない自分という存在を久々に取り戻したことを感じていた。もう涙も止まっていた。泣く必要はない！不思議と確信に満ちてそう思えた。藤塚はその日は心地よい気持ちで眠りにつくことが出来た。

第十三章

「先生は紫陽花の花が好きなんですね」

看護婦に背後から突然声をかけられ、藤塚ははっと我に返った。往診前の昼休み、机の上の花瓶に活けられた紫陽花の花を眺めながら十年前の記憶を辿っていたところだった。

「だって、先生だけです。この病院で、この季節、花瓶にわざわざ紫陽花の花を活ける先生は」

藤塚は苦笑いをした。

「そうだよ。とても大好きなんだ。だってこの花のおかげなんだから、僕が医者になれたのは」

看護婦は不思議そうな顔をして答えた。「紫陽花のおかげですか？ 変なの」精神科の医者は変わり者が多い、そんな先入観もあるのだろう。

「じゃあ、先生が往診に熱心なのも、その紫陽花と関係があるんですか？」

この看護婦の質問に藤塚は真正面から答えた。

「その通り。苦しんでいる人を助けるにはね、現場に飛び込まなきゃ話にならないんだって、彼女が教えてくれたのさ」

看護婦は笑って答えた。

「紫陽花が先生の彼女ですか！ まあ、私は用無しですね」

彼女はそう言う立ち去った。自分に用事があったわけではなさそうだった。医局の反対側に彼女は姿を消した。

看護婦への答えは、しかし、偽らざる藤塚の心のうちである。

藤塚は再び高校生時代を振り返った。高校生活の三年間、苦しいことがあれば彼女のことを思い出した。「いつもあなたを見守っています」という彼女の言葉にいつも励まされた。そして梅雨の時期には必ず紫陽花の花を見に行った。あのアパートへ。紫陽花と共に確かに彼女は常にそこにいた。彼の目にははつきりと見えた。そこに行けば彼女に会えた。「私はどこへでもすぐに飛んで行けるの」と、彼女の言っていた通りであった。美しい紫陽花の花は彼女そのものだった。

大学進学は迷わず医学部と決めた。彼女のような思いに苦しんでいる人を救いたかった。左翼思想をどんなに勉強した所で、結局目の前の血に染まった人を救えるのか？家族の抱える矛盾、社会の抱える矛盾が生み出す？心の？病を社会主義思想が救えるのか？彼の出した結論は「何か違う」だった。当然の如く、彼は医師になるなら精神科を志すことも決めた。そしてその一心からひたすら厳しい受験勉強に耐えた。

京都の大学を選んだのも、少しでも彼女のそばにいたいという第三者から見れば幼稚な、しかし彼にしてみればとても重要な理由からであった。

そして希望通り精神科の医師となった。そして府内の精神科の病院で忙しい日々を送っている。

無論彼女に出会えたわけではないが……。

でも、と藤塚は思う。今になってみるとそんなことはそれほど重要ではないのだと思う。いや、確かに彼女がその後元気で暮らしていて欲しいと思う。しかし手の届かぬことにいつまでも執着しては先に進めない。

また、実際地図上の遠い近いは意味が無いのだ。精神は自由だ。常に飛びまわれる。常に交流が出来る。彼女が手紙で言っていたとおりだ。彼女の精神がむしろ自由なのであって、魂を自らの心のうちに縛り付けている人のほうこそが？心の？病を患っているのかも

しない。

何が正常で何が異常なのか？

それを決めるのは誰か？

彼女がその後どうなったかまったく知る由はない。しかし、紫陽花の花は毎年、どこかで必ず美しく開花する。梅雨の時期に。そのたびに彼は思い起こす、あの青春の一時を。そして紫陽花に語りかける。

「ありがとう、いつも僕を支えてくれて」

それだけでいい。それだけで事足りる。藤塚はそう語りかけるだけで十分満足なのだが、でも優しい紫陽花の花は必ず彼に応えてくれる。にこっと微笑んで。

「いいえ、こちらこそ。いつも私を見守ってくれてありがとうね」

そう言つと、彼女は必ずきらつと輝きを見せる。その輝きが藤塚を魅了する。こんなに美しい花は他にはない。そう思う。「それでもいつか彼女に会えるだろうか？」心にそう思つた瞬間、目の前の紫陽花がかたつと音を立てて動いたように思えた。

「雨が止んだんだ」

医局のガラス窓から日の光が差し込んだ。先ほどから降っていたにわか雨がやんだのだ。するとまた十年前のことが思い起こされる。あの事件の現場……。激しく窓に打ち付けた雨のあの音が生々しく再現される。彼女が搬送されるシーン、次々と再生されていく。鮮明に覚えている、そして最後に、救急車が走り去つた後の、あの時の雨上がりのきれいな夕陽とそれに照らされて美しく輝いた紫陽花の花を思い出した。そんな思い出に操られるように、藤塚は席を立つと窓の方へ向かつて歩いた。

窓の前に立つと、病院の庭に一面に咲く紫陽花の花が、雨にぬれた潤いをはじけさせるかのように太陽に照らされてそれぞれの色を輝かせている。藤塚はその美しさに圧倒された。

すると、何か大きい力に揺り動かされる自分を感じた。十年分の思い出が一気に頭の中で渦を巻き始めた。そして渦の中止に彼女の

笑顔があつた。はつきりと見える。はつきりと、手を伸ばせば届きそうだ。

「会えたね……」

夢見心地で、藤塚は窓辺に暫くたたずんでいた。梅雨の季節もそろそろ終わる。

「また、来年も必ず会おうね！」

そう固く心に念ずると、藤塚は白衣を身に纏った。

「さて、往診に行くか」

医局を後にする藤塚の後姿を、机の上の紫陽花の花がいつまでも笑顔で見送っていたことを、見る人は見ていたであろう。知る人は、きっと知っていたであろう。心ある人は、きっとやさしくそんな二人に声援を送ったであろう……。

しかし、心を頑なにする人にはなかなか見えないであろう。

この精神の自由さが

この魂の交流が

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037w/>

紫陽花

2011年8月22日03時32分発行